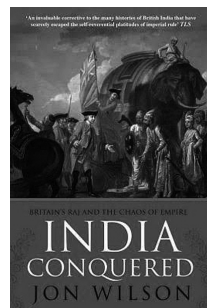


書 評

Jon Wilson, *India Conquered:
Britain's Raj and the Chaos of Empire*
(London: Simon & Schuster, 2016)

稲垣 春樹



本書は気鋭のインド史家ジョン・ウィルソン(キングズ・カレッジ・ロンドン)による1600年から1947年までの英領インド植民地の通史である。学術的な水準を維持しつつ一般読者に向けて書かれた本書の最大の特徴は、ニール・ファーガスン流の帝国主義礼賛に対する批判、すなわち鉄道敷設や教育・医療・法の普及といった側面から西洋列強による植民地支配を肯定的に評価する立場に対する厳しい論駁にある。本書においてウィルソンは、帝国という過去にイギリス人が抱くノスタルジーを批判し、無知と暴力に基づく無秩序な植民地統治が現地社会を混乱に陥れる様子を鮮明に描き出した。本書を通じて浮かび上がってくるのは、一貫した植民地統治の思想と政策に基づき現地社会を改変していく強いイギリス帝国像ではなく、次々に生じる問題に直面した現地行政官が現地社会の構成原理を理解できないままに場当たりの対症療法を繰り返す弱いイギリス帝国像である。帝国支配とは、一貫したヴィジョンに支えられたひとつのプロジェクトではなく、植民地を統治する能力を欠き、反乱を恐れ、自己保身のために暴力に訴える弱い統治者が生み出した混乱の集積であった。混乱、不安、恐怖をキーワードとして300年以上にわたる全インド的な傾向について議論するために、ウィルソンはイギリスとインドの複数のアーカイヴにおいて史料調査を重ね、あらゆる時代と地域についての事例研究を積み重ねるというアプローチをとる。多彩な人物・事件を平易な文体で紹介しつつ学術的にも高度な議論を展開する本書について、まずはごく簡単に概要を確認した後、その特徴と限界を検討する。

500ページを超える本書は全12章からなり、1600年の東インド会社設立

から1947年のインド・パキスタンの独立までを扱う。第1章から第3章までは、17、18世紀のインド社会とそこに参入していった東インド会社の初期の活動を検討する。特に会社がマラーター帝国の海賊のみならずイギリス人私商人の活動をも全く統制できなかったことが強調され、現地の情勢に対応できない植民地政府というモチーフが導入される。第4章ではクライヴとブラッシーの戦いが議論されるが、強調点は、徴税を最優先とすることで飢饉を誘発した征服直後の失政にある。5章では征服領土を獲得した会社が新たな統治システムを創出しようと苦闘する様子が、ヘイスティングズ、コーンウォリス両総督の統治を概観する中で描き出される。ここでも、インド統治を規定していたのは現地の危機と行政官の恐怖であったという視点が強調される。それは1820年代の部族反乱をはじめとする危機の諸相を詳述する第6章、そしてそれへの対応として機械的で専制的な統治の方策が場当たりのに生み出されていく様子を描いた第7章でも同様である。そのような統治のあり方の一つの帰結が、第8章の扱う1857～8年のインド大反乱であった。第9章では会社の社会経済政策が扱われ、鉄道、灌漑をはじめとする公共事業が政府の軍事的・政治的な危機に対する対応策であったことが指摘される。第10章では、インド統治の根幹をなす立法行為が同様の視点で説明される。そのようなカオスに対する場当たりの植民地支配の帰結が、飢饉に代表される社会経済の混乱(第11章)、そしてベンガル分割を契機として高まりを見せたナショナリズム(インド国民会議派、スワデシ運動、ガンディーの台頭)であった(第12～15章)。

以上のようなストーリーを通じて著者が一貫して主張するのは、イギリス人現地行政官の「支配権／主権」(sovereignty)維持への不安・パラノイアという感情の要素の重要性である。ウィルソンは、植民地統治を本国の政治家や理論家の整然とした理論に照らして理解しようとする態度を批判する。現地行政官の目的は統治そのものを存続させることであり、彼らの方針決定の根幹には生存への不安が存在した。それゆえ、統治を支える名誉や威信といった要素は物質的な重要性を持ち、経済的な利益に優先した。帝国の権力は権力を維持するためだけに用いられたのであり、何らかの一貫したヴィジョンを実現するために用いられたのではなかった。このように説明するウィルソンがとりわけ大きな重要性を与えているのが、征服者

たる行政官に恐怖心を懐かせる最も直接的な脅威であった武装勢力による反乱である。征服後の領土においては、戦時に雇用されていた武装勢力（ピンダーリー、タグ、ダコイトなどと呼ばれた）が浪人としてあふれ、社会を不安定化した。さらに彼らはインドの有力諸侯と連合することでイギリスに対する大規模な反乱を引き起こした。この点に着目することで、本書は1824年や1879～80年など従来あまり着目されていなかった危機の重要性を指摘するとともに、従来は警察や刑法に関する国内問題として、あるいは人種差別的な社会改良政策の帰結として議論されてきた部族反乱や農民反乱が、政治史の根幹にかかわる重要なテーマであることを示した。

このように、自らの支配を保持することそれ自体が植民地統治の目的であったことを強調するウィルソンは、イギリスの統治が経済的あるいは戦略的な利益の追求に基づいていたという想定を否定する。もちろん本書においても、初期（17世紀）の会社の活動が経済的な動機に基づいていたこと、あるいは20世紀の二つの大戦がグローバル経済におけるインドの重要性を高めたことなどは指摘されている。しかしながらウィルソンは、現地のカオスに対処する行政官の危機意識が具体的な政策に転化していく過程を事例研究により示すことで、植民地統治は何らかの経済的・地政学的な見通しに基づくものではなかったと主張する。同様にウィルソンは、法、鉄道、蒸気船、灌漑設備などが導入されるきっかけとなった出来事を検討し、それらは政治的な支配の維持に必要であると行政官が考えたものであり、良いことだから／儲かるからはじめられたわけではないことを論証した。しかし同時に、本書の議論は単に他のアプローチを無視して行われているわけではない。むしろ本書は、政治史的な解釈を前面に出すことで、例えば、社会経済史研究が描くインド洋世界におけるインド人商人の活躍という物語と、社会史・文化史研究が強調する政治的な排除と暴力の物語を総合することに成功している。すなわち、統治の維持を唯一の目的とする植民地政府のもとにおかれたインド人は、統治に関する公的＝政治的な決定に関与することは許されなかったが、私的＝非政治的とされた領域においてはエイジェンシーを発揮できたのである。このように、本書の議論は狭い政治史を超えて幅広い研究者に対して開かれている。

ウィルソンの前著は1780年から1835年までのベンガル地方に関する著

作であった。¹ これを受けて、本書においても18世紀から19世紀への転換がナラティヴの軸となっている。ウィルソンは、18世紀ムガル帝国時代のインドの政治社会を交渉に基づく多元社会として特徴付ける。そこは直接的でオーラルな対人関係、交渉、合意形成に基づく社会であった。支配者には諸勢力のバランスをとって反対勢力を内部に取り込むことが求められ、被支配者にとって抵抗は交渉のオプションであった。イギリス支配はこれとは全く異なる統治原理に基づいていた。それは文書に基づく匿名の支配であり、自らをインド人という人口から切り離された他者 (strangers) として措定するものであった。会社は安定的な徴税を目指して土地所有者とされた地方の小王の取り込みを図ったが、彼らは文書を送りつけるだけで直接会って口頭で説明責任を果たそうとしない会社への不信感を高めた。ここでウィルソンは、以上のような変化が17世紀からすでに見られたと主張する。これは前近代インドの統治様式と1830年代までの東インド会社の統治様式に連続性を認めるC・A・ベイリーら「修正派」の見解と異なる点であり、植民地インド史の全体像に関する大きな論点として今後議論されていくだろう。

このように意義深い本書であるが、すでにほかの書評において、以下のような限界も指摘されている。まずデイン・ケネディが指摘するように、ウィルソンのナラティヴは男性エリート中心主義的である。次に、これもケネディが指摘するように、本書はインド＝イギリス関係史という色合いが強く、フランスやオランダなどほかのヨーロッパ諸国、およびインドの周辺諸国との関係史という視点は薄い。² 第三に、リシ・ラジが指摘するように、本書はムガル帝国について直接検討していないため、ムガル帝国からイギリス帝国への統治様式の変化を過度に強調している可能性がある。³ 以上の三点は、どれも外在的ではあるが妥当な指摘であり、インド史家、イギリス帝国史家の双方が、ウィルソンの研究を下敷きにして、さらなる実証研究に進む際の手掛かりになるだろう。本書で言及された数々の事例は、様々な観点から個別に検討するに値するものばかりである。

イギリス帝国の弱さの感覚に敏感になる必要はリンダ・コリー『虜囚』(原著2002年) などにおいて先取りされていた論点であるが、本書はそれを植民地インドについて全面展開してみせたものとしても意義深い。不安と恐

怖という要素が植民地統治に与えた影響の検討は、今後のイギリス帝国史研究において中心的な課題の一つとなるであろう。クライヴ、インド大反乱、ガンディーなどのよく知られた人物・事件に斬新な再解釈を提示しつつ、例えばアラーハーバード高裁判事サイード・マフムードなど、あまりよく知られていない事件・人物の分析を通じて通史を描く著者の手腕は見事である。堅実な史料読解に支えられたスケールの大きな議論を展開する本書は、読者の関心に応じて様々な新発見を提供するだろう。イギリス帝国史、インド植民地史、そして植民地性や近代性について考察するための必読書である。

注

- 1 Jon E. Wilson, *Domination of Strangers: Modern Governance in Eastern India, 1780-1835* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008).
- 2 Dane Kennedy, review, *The Journal of Asian Studies*, 76/2 (2017), 561-2.
- 3 Rishi Raj, review, *Financial Express*, 9 Oct 2016.

—— 首都大学東京助教